土地の優しさを小さく受け取るアパートメント集落

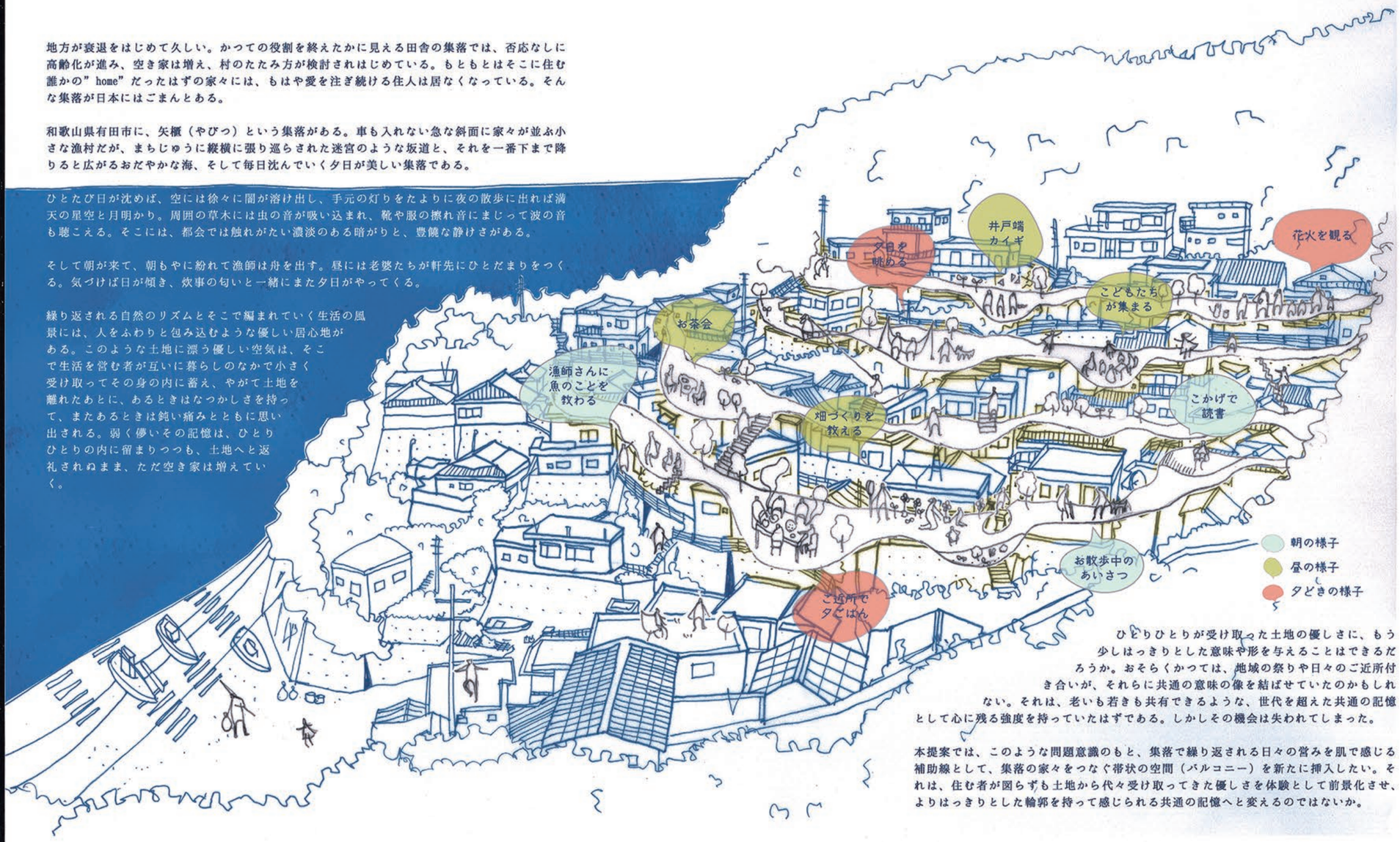
地方が衰退をはじめて久しい。かつての役割を終えたかに見える田舎の集落では、否応なしに高齢化が進み、空き家は増え、村のたたみ方が検討されはじめている。もともとはそこに住む誰かの”home”だったはずの家々には、もはや愛を注ぎ続ける住人は居なくなっている。そんな集落が日本にはごまんとある。

和歌山県有田市に、矢櫃（やびつ）という集落がある。車も入れない急な斜面に家々が並ぶ小さな漁村だが、まちじゅうに縦横に張り巡らされた迷宮のような坂道と、それを一番下まで降りると広がるおだやかな海、そして毎日沈んでいく夕日が美しい集落である。

ひとたび日が沈めば、空には徐々に闇が溶け出し、手元の灯りをたよりに夜の散歩に出れば満天の星空と月明かり。周囲の草木には虫の音が吸い込まれ、靴や服の擦れ音にまじって波の音も聴こえる。そこには、都会では触れがたい濃淡のある暗がりと、豊饒な静けさがある。

そして朝が来て、朝もやに紛れて漁師は舟を出す。昼には老婆たちが軒先にひとだまりをつくる。気づけば日が傾き、炊事の匂いと一緒にまた夕日がやってくる。

繰り返される自然のリズムとそこで編まれていく生活の風景には、人をふわりと包み込むような優しい居心地がある。このような土地に漂う優しい空気は、そこで生活を営む者が互いに暮らしのなかで小さく受け取ってその身の内に蓄え、やがて土地を離れたあとに、あるときはなつかしさを持って、またあるときは鈍い痛みとともに思い出される。弱く儚いその記憶は、ひとりひとりの内に留まりつつも、土地へと返礼されぬまま、ただ空き家は増えていく。

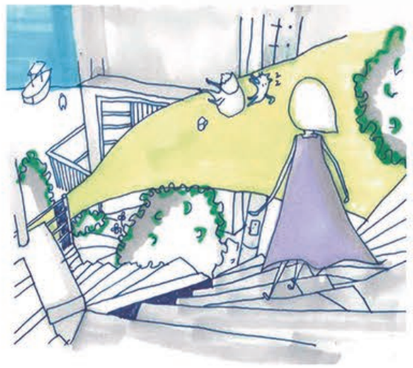


ひとりひとりが受け取った土地の優しさに、もう少しはっきりとした意味や形を与えることはできるだろうか。おそらくかつては、地域の祭りや日々のご近所付き合いが、それらに共通の意味の像を結ばせていたのかもしれない。それは、老いも若きも共有できるような、世代を超えた共通の記憶として心に残る強度を持っていたはずである。しかしその機会は失われてしまった。

本提案では、このような問題意識のもと、集落で繰り返される日々の営みを肌で感じる補助線として、集落の家々をつなぐ帯状の空間（バルコニー）を新たに挿入したい。それは、住む者が図らずも土地から代々受け取ってきた優しさを体験として前景化させ、よりはっきりとした輪郭を持って感じられる共通の記憶へと変えるのではないか。

■帯状のバルコニーで層をつくる

集落に対して４階層のバルコニーを帯状に挿入する。もともとの自然な傾斜に対して、ある種、人工的に水平の階層を入れ込むことで、まちに新しいリズムが生まれる。



■集落に新しい表情をつくる

もともとの迷宮のように入り組んだまち並みに、バルコニーが陰影ある表情を新たに加えていて、歩いて楽しい。集落を水平に横切れる道が増えて便利にもなり、バルコニーがつくる優しい日影で休憩することもできる。

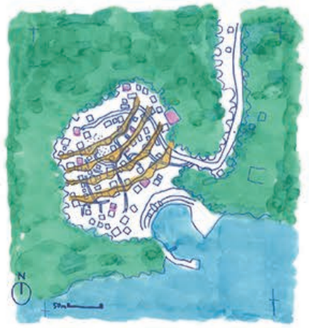
■夜の集落に灯を点す

日が沈んだあとは、バルコニーに仕込んだ穏やかな間接照明が足元を照らし、夜にふらりと散歩に出かけたり、家と家を行き来したりすることができる。バルコニーの存在が、１日の始まりから終わりまで、海や太陽、そして隣人たちから受け取る小さな優しさに形を与える一助となる。

［ Phase 0 ］ 現在の矢櫃 ｜空き家の多い集落

－矢櫃という集落は、海を臨む急な傾斜地にあり、張り巡らされた小路によって大人でも迷子になりそうな複雑なまち並みとなっている。かつては漁師町であり、釣り客などが訪れる観光地としても栄えたことがあるが、周辺地域の衰退と、集落の奥まで車が入っていけない不便な立地条件もあいまって、新しくこの地に住もうとする人は少なく、現在は空き家の多いエリアとなってしまっている。

［ Phase 1 ］ 集落に帯状のバルコニーを挿入する ｜風景を意味づける

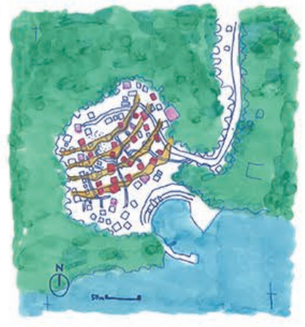


－家々自体に手を入れるのではなく、集落内の家と家を水平につなぐように帯状のバルコニーをいくつも挿入する。これにより、まちのいたるところから海を臨みやすくなる。朝は漁に出ていく舟を眺め、夕には沈む日を眺めるような体験が、住人の日常のなかで前景化する。あたかも、マンションの各戸のバルコニーから住人が花火を眺めるように、矢櫃の住人たちはめいめいバルコニーに溜まり場をつくり、ビール片手に夕日を見る。バルコニーは住人のアイデアに応じてさまざまなアクティビティの場として活用されていくが、そばにはいつもおだやかな海の存在感と、お隣さん同士の小さな気配が感じられる。

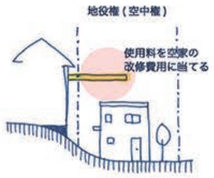
1階のバルコニーが隣家の２階と繋がる

－傾斜地にある集落の特性上、家々が立つ高さはまちまち。そこを水平に走るバルコニーはある家の１階と別の家の２階をつなぐようなことにもなり、集落に新しい立体感を生む。

［ Phase 2 ］ そしてアパートメント集落へ ｜空き家を積極的に活用する



－多層に組まれたバルコニーを持つ集落は、あたかもひとつの大きなアパートメントのように見立てることができるようになる。そこで、空き家だった各戸を住居として使いつつも、ある家は客人を泊めるゲストハウスとして使ったり、あるいは老人たちが日中を過ごすデイサービスや、子どもたちが集まる保育所として活用する、そしてある家の庭は農園にするなど、各戸に新しい役割と意味を加えていきながら、”アパートメント集落”として住み継いでいく。



－張り出したバルコニーは、その真下にある土地の空中を占有する可能性がある。これを逆手にとり、新設するバルコニーの所有者（たとえば基礎自治体）が、下方の土地に対し地役権（空中権）契約を結び、一定の使用対価を支払うことで、下層の家の改修費用に当てたり、販売価格を引き下げるようなインセンティブをつくるというスキームを新たに提案できる可能性がある。